平成２３年１２月１日発行

かまにし

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第４２号

わがまちの顔

津軽三味線でボランティア　荒田　保さん

鳥料理のお店を切り盛りしながら、津軽三味線を通してさまざまなボランティア活動をなさっている五十九歳の荒田保さんを、西蒲田四丁目のお住まいに訪ねました。

習い始めのきっかけは、すでに三味線の稽古をしていた母親の影響でした。もともとエレキギターを弾き、仲間のグループと演奏会をやっていたこともあり、三味線に馴染むのも早く、すぐに熱中するようになりました。

高橋竹山の流れを汲む工藤流の門下生となり、平成元年に工藤照仙の名をいただき、名取となりました。入門以来今日まで三十数年間の研鑽を積み、現在は十数人のお弟子さんに民謡三味線や津軽三味線の稽古をつけています。お弟子さんの中にはフランス人も居り、シャンソンの合間に三味線演奏をいれるなど新しい試みにも挑戦しています。

津軽三味線は他の民謡にくらべ、テンポの速い曲の独奏が多く、撥をたたき付けるように弾く独特の打楽器的奏法のため、三味線の消耗も早く、特に胴に張る皮は半年ほどで張り替えることもあるそうです。一般に三味線は猫の皮を使用します。特に津軽三味線は例外もありますが、丈夫な犬の皮を使用しています。

三味線の糸は本来絹糸ですが、切れやすいため、津軽三味線ではテトロンやナイロン製を使用しています。また糸の番号は太いほうから一の糸、二の糸、三の糸と呼んでいますが、太さではなく重さの違いが重要です。津軽三味線の一の糸は特に太く重い十七、二の糸に十五、三の糸は十三と、普通の三味線より太くなります。演奏の際も音色の効果を考えて、駒の位置も、その都度調整しなくてはなりません。

思い出に残る出来事は、昭和六十年のＮＨＫ紅白歌合戦で歌手、細川たかしの「望郷じょんから」の伴奏者として出演したこと。平成十三年八月、ハワイへ観光旅行に行った際、マウイ島の日本寺院、ラハイナ浄土院の盆ダンスに遭遇しました。奉納演奏に自主参加したところ大変喜ばれ、以後、毎年参加しています。

荒田さんが主宰する「鳥保会」はボランティアとして各団体の総会、歓送迎会、同窓会等のイベントに参加し、地元の女塚保育園の盆踊りをはじめ、老人ホーム、福祉施設の慰問、大森夢フェア、大田区芸術フェスティバル、文化の森収穫祭に出演しています。

日本の伝統芸能の津軽三味線や民謡の伝承者を一人でも多く育てようと頑張っている荒田さんですが、私たちに三味線の説明をしている時の目が、ひと際輝いているのが印象的でした。

（取材　石渡、塩田、前田委員）

中央が荒田さん

投稿　内蒙古脱出

前略、突然お便りを差上げる失礼をお許しくださいませ。

西蒲田に移って十七年になります。「かまにし17」の毎号を楽しみに拝読させて頂いております。この度、第三十八号に投稿されました文中に、「内蒙古脱出」・「張家口」の文字が目にとまり、驚きと懐かしさのあまり一気に読みきってしまいました。

実は私も内蒙古脱出の体験者なのです。

終戦の年、昭和二十年三月に弟の中学入学に合わせ、私も張家口日本高等女学校の三年に編入し、学校近くの寄宿舎に入ることになりました。

父親は此処より二百キロ以上も離れた大同政庁、山陰県代岳鎮の参事官であったために、私と弟二人だけが家族と離れて暮らすことになったのです。

八月の或る日、突然兵隊さんが寄宿舎にあらわれ、日本人はすぐに張家口駅に集まるように言われました。学校の先生方はすでに一人も残っておらず、訳も分からずに、とにかく駅まで行きました。広い駅前広場は集まった人々で大混雑をしていました。一銭のお金も持たず、着のみ着のまま、弟とも連絡も取れず、無蓋の貨車に乗せられてしまいました。見知った人は誰も居ないし、何処に向かっているのかも分かりませんでした。列車は動いたり止まったりの繰り返し。日が暮れて、やがて真っ暗な夜になり、また朝が来る。何日、無蓋車の上で過ごしたかも覚えていません。周りの人達から食べ物を貰い、到着したのは天津でした。

天津松島小学校に収容され、やっと弟と再会することが出来ました。何も出来ず心もとない私にとって、年の離れた中学生の弟が、実に頼りがいのある男に見えました。私の髪の毛は丸坊主にされ、服も男物を着せられ、学校の門の外には絶対に出てはいけないと言い渡されました。若い娘が危害に遭うことを防ぐ配慮でした。

遠く離れた家族には連絡も取れず、父は責任ある地位にいたために、もう会うことは出来ないかもしれない。なんとなく思い始めた頃、父の部下であった人から連絡が入りました。両親、祖母、年少の弟たち全員が無事であること、今すぐには逢えないが必ず迎えに来ること。話を聞いた時には、周りの景色が、一瞬、ひかり輝き、頬を流れる涙が止まりませんでした。

家族と再会し、本土長崎港に着いたのは、十二月の初旬でした。今になって考えれば、私たちは運が良かったとも思えてきます。

私は昭和六年生まれ、八十歳になります。高齢と病弱のため、御近所の方々の暖かいサポートを受けながら日々を過ごしております。御紙のお陰で六十五年前の記憶を、断片的で、霞んでしまった記憶を、懸命に思い出しながら、書き綴ってみました。遠い日の思い出が懐かしく、また大きな勇気を頂きました。ありがとうございました。

早々

永妻悦子（西蒲田三丁目）

※昨年の十二月に頂いた投稿文でしたが、十周年記念の準備等で掲載が遅れてしまいました。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	３０，１４０人
	女	２７，４１６人
	計	５７，５５６人
世帯		３１，５１０世帯

平成２３年１１月１日現在

編集後記

本紙も前号で十周年を迎え、編集委員一同初心に戻って、これからも皆様に楽しんで読んでいただける紙面にしていきたいと思います。

今回の特集記事は、投稿記事に対する読者の皆様からの情報を基に、取材を進めたものです。多くの方々に情報を頂き、ありがとうございました。

四面は、掲載した投稿記事をお読みになった方からのお手紙です。

これからも、皆様からの投稿やご感想をご紹介していきますので、事務局までお寄せください。お待ちしています。

本紙第二十九号のわがまちの顔でご紹介した、ランナーの中野陽子さんが、今年八月に開催された全日本マスターズ陸上競技選手権大会で三千メートル走に出場し、女子七十五から七十九歳の部で世界新記録を樹立されました。おめでとうございます。

情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

多摩川土手を走った路線バス

本紙四十号に掲載された投稿文「多摩川土手を走る路線バス」に対し、早速、読者から情報を頂きました。バス路線の載った地図を見て、この題材を特集記事に出来ればと、取材を行いました。

二枚の地図

手元にコピーされた旧蒲田区の地図が二枚ある。一枚は昭和十二年一月、東京地形社発行の蒲田区詳細図（大田図書館所蔵）と、もう一枚は昭和十五年八月、同社発行の蒲田区詳細図（矢口三丁目、小宮仁様所蔵）である。二枚とも当時のバス路線が、停留所の位置も含めてはっきりと書き込まれている。

ところが、この二枚には大きな違いがあった。「昭和十二年版」は小林町方面からの路線が本門寺道との交差点、岡薬局（当時）前を右折し道塚駅方面へは向かっていない。

一方、「昭和十五年版」には蒲田商店街の中央付近まで路線が伸び、終点と思われる場所、西蒲田七丁目四十八番、亀屋（当時）前にバス停が表示されている。

西六郷二丁目の木内綾様は、「昭和十三年（当時十四歳）には通学に蒲田まで利用していた」との証言もあり、早い時点に蒲田まで延長されたと思える。また同氏より「内回り、外回り」という路線の話も聞いた。

内回り路線を追う

（所在地表示は現在の住居表示です）

始発バス停、「亀屋前」の次のバス停は、何故か二百メートルにも満たない日の出写真館前である。バスはそのまま直進し池上線の踏切を渡り、本門寺に通じる御練街道との交差点、岡薬局前で内回りは直進、外回りは左折する。

そのまま西行、東矢口三丁目十五番の交差点にバス停。ここを右折し矢口東小学校を右に、多摩堤通り交差点バス停で左折、目蒲線の踏切を渡り矢口小学校を左に見て、矢口二丁目十三番、バス停「実践女子高前」で交差点を左折、南下する。

延命寺を右に、今泉、古市町の町並みを抜け、多摩川土手に突き当たったところが矢口三丁目十七番、通称「森田屋前」のバス停である。

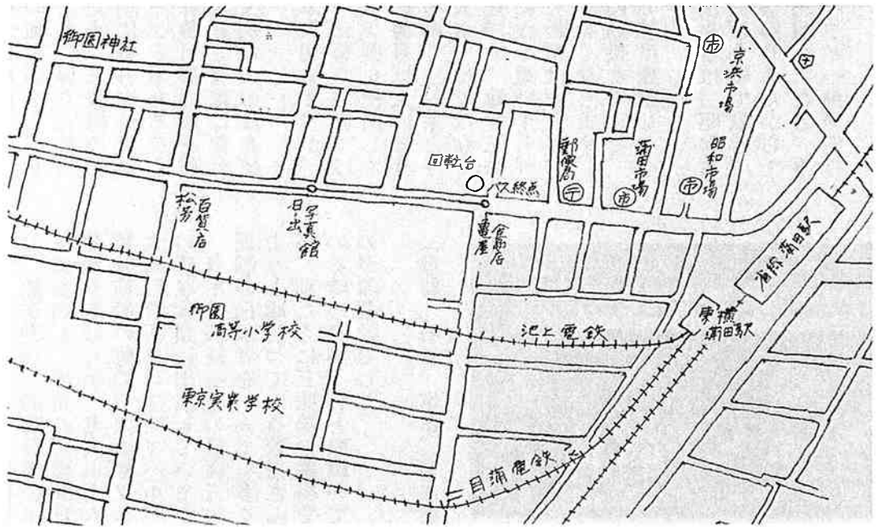
突き当りを左折、土手の下を走る車道を六郷方面に向かう。多摩川二丁目二十四番先から車道は土手に上る、右手には中央工業の高い煙突が煙を吐く。

多摩川が右に大きく湾曲する手前、旧原町から西六郷一丁目に入ったあたりに唯一土手上のバス停があった。

さらに土手上車道を南下、転落事故現場と思われるカーブを過ぎ、左車窓には古川薬師の甍が映る。川の蛇行により、河川敷の幅が広がり溜池や六郷ゴルフリンクが見えてくるが、車道は左に土手から下りる。西六郷四丁目三十五番、高幡神社手前にバス停があり、現行のバス路線を逆行する。

さらに路線は直進し、省線の踏み切りを渡り京浜急行「六郷土手」駅近くに終点があった。仲六郷四丁目十八番あたりに蒲田と同様、回転盤を設けていたのではないか。

蒲田への帰路は省線の踏切を再び渡り、すぐに右折、現行バス路線を逆行し、高畑小学校からは現行と同一路線で北上する。右にグリコ工場、左には宝幢院、続いて町屋駐在所を過ぎて、現行路線と別れる。驚くことにこの間、約一、八キロにバス停が一箇所も無い。「手を上げれば何処でも止まってくれた」一様に語ってくれた。



旧蒲田区の地図を基に委員が作成

新蒲田三丁目二十七番先のバス停を右折し約二百メートル進み、本門寺御練街道に突き当たる。正面は蒲田電車区である。左折し北上すれば約三百メートルでバス停。道塚郵便局と六郷用水をはさみ道塚派出所がある。新蒲田二丁目二十一番先だ。

さらに約二百五十メートル北上し目蒲線、道塚駅の踏み切りを渡りバス停「道塚駅」がある。

あと二百メートル北上すれば岡薬局の交差点、右折して往路の路線に戻る。

全行程を地図上で測定してみた。約八・四キロメートルであった。

路線バス運行は何時から

今回は蒲田西地区のみならず、矢口、六郷の各地区で多くの方々に取材を試みた。

最高齢である西六郷二丁目の塩澤様は現在九十歳、昭和十年には高等小学校に入学していた。しかしそれ以前にはバスの記憶は無いという。高等小学校卒業後、制服に前鞄を下げバスの車掌姿の同級生と乗り合わせた話などを語ってくれた。

東矢口三丁目の伊藤信一郎様は現在八十六歳、小学校四、五年生の頃、（昭和十一～十二年）道塚駅付近で遊んでいた子供達を、顔なじみの運転手が蒲田までタダで乗せてくれたと話す。

以上の聞き取りから、昭和十年（一九三五）前後に開通したと思われる。

運営会社は東急か

取材した人の何人かは、東急（東横電鉄）だったと当然のように答えたが、はたしてそうなのだろうか。東急本社には資料がまったく無いという。大正十一年（一九二二）の目蒲線運行以来、運輸事業を広げてきた東横電鉄が昭和十二年（一九三七）に乗合バス会社である目黒自動車運輸、芝浦自動車の二社の合併が東急電鉄の社史に載っている。

昭和七年（一九三二）には大田区には京浜、城南、大森、梅森、池上、目蒲と六つの乗合バス会社が存在したが、六社とも東急系か京急系に統合されている。この中に「土手を走った」路線は入っていない。芝浦、目黒とともに後発組であったのであろう。「土手を走った」この路線が他社の経営なら同様に合併工作はなされていたはずだ。

気がかりなことは、蒲田商店街まで延長する際、なぜ商店街の中ほどで止めてしまったのか。東横電鉄なら蒲田駅まで延長したはず。さらに言えば、企画の段階でまず蒲田駅からを、中心に考えるのが当然である。

以上から、吸収合併に失敗した、とするならこの一社は何処であったのだろうか。

代用燃料と空襲

開戦直後より、ガソリン不足から代用燃料が使われるようになった。バスの後部に燃料ボイラーを取り付け、薪、木炭等を燃やし、そのガスでエンジンを動かした。出力不足でスピードが上がらず、伊藤哲夫様は、カーブで減速するバスの後部ボイラー籠に掴まり遊んだ記憶があると話す。

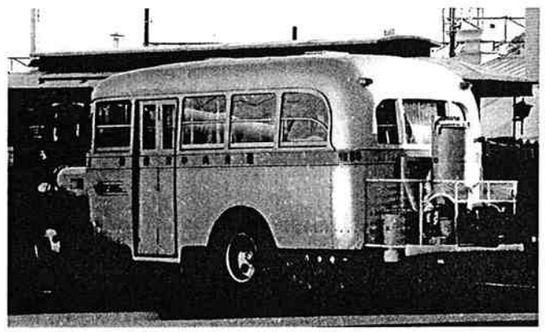
昭和二十年四月に二度の大空襲を受け蒲田区は壊滅的な被害を受けた。被災直前までバスが走っていたかは定かではない。

道幅が四メートルにも満たない「多摩川土手を走った路線バス」も、年月が過ぎるとともに人々の記憶の彼方へ押しやられ、路線地図だけが残る幻のバスとなってしまうのか。

今回、お忙しい中を取材に協力をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます（順不同）

蒲田西地区
伊藤哲夫様　昭和五年生
大塚茂子様　大正十三年生
岡希様太郎　昭和十六年生
伊藤信一郎様　大正十四年生
矢口地区
山田　登様　大正十三年生
小宮　仁様　昭和十五年生
瓜生　孝様　昭和五年生
小宮礼子様　昭和三年生
伊平澄江様　昭和五年生
六郷地区
塩沢はる様　大正十年生
木内　綾様　大正十四年生

※写真は当時のものではありません。神奈川中央交通様よりお借りした復元バスをイメージとして掲載したものです。

参考文献
大田区の文化財第二十五集
東急五十年史

（取材　都築委員）